

risus paschalis

—近世ドイツの民衆と復活祭説教をめぐる歴史的

素描——

吉田孝夫

十六世紀から十八世紀前半にかけて、近世ドイツのカトリック地域でのことである。長く厳しい冬のあと、春の復活祭を迎えると、民衆説教師は滑稽話を説教壇から物語り、主に下層から成る聴衆を哄笑に誘っていた。その慣習をラテン語で risus paschalis (復活祭の笑い) と呼ぶ。滑稽な喩え話を自由に用いたこの説教は、身振り手振りに物真似さえまじえた、いわば一人芝居に近いものであり、長い四旬節のあと、民衆によく与えられた春の喜びの一つとなっていた。しかし説教師は、時に卑猥な行為や下劣な物語に入りこむことも少なくなかったため、教会上層部からは白眼視されていた。この慣習は啓蒙主義の時代に入ると徹底的な弾圧を受け、農村の一部でわずかに残るばかりとなり、やがて静かに命脈は途絶える。

十六世紀の宗教改革の後、プロテスタントは讚美歌やオルガン曲など、抽象的芸術としての音楽によって、一方カトリックは具象的芸術としての華麗なバロック美術や建築によって民衆教化に努めたと言われるが、後者にはさらに、喩え話を多用するこの復活祭説教を付け加えることができる。トリエント公会議を機に中世伝統の再確認を行ったカトリック教会は、聖職者養成制度の組織化、説教改革、また中世寓話集の再版などを果たした。この寓

話集は近世説教師が依拠する重要な資料となる。しかし春を告げる復活祭にとつての、笑いの意義を重視する説教師は、禁書リストに挙がる書物や、民衆のあいだの伝承、実話なども有効に利用した。それらを一括して「説教メルヘン」と呼ぶのであるが、この導入を境に、従来問題となっていた教会礼拝中の居眠りは一掃されたという。

滑稽な説教師が続出したのは、近世のなかでもとりわけ十七世紀中葉以降である。この世紀は三十年戦争に象徴される実に危機的な、そして深い無常感に包まれた時代であった。政治的にも経済的にも、また自然天候の上でも波乱が続き、特に下層の民衆がそのあおりを受けた。そのような状況下に、春の哄笑は彼らにとつて数少ない、大切な憩いの時となる。

教会上層部からの批判を受け、民衆説教師たちは種々の論拠を挙げて復活祭の「説教メルヘン」を弁護する。なかでも特筆すべきは、旧約聖書コヘレトの言葉に言う、「泣くべき時があり、笑うべき時がある」という一節を引いたものである。人間の営みの根本的な虚しさと思かさをうたうこのコヘレトの言葉は、まさにこの十七世紀に、多くの神学者や著述家の関心を集めていた。虚無を嘆きながら、しかし「今、ここ」に与えられた眼前の快樂を肯定もするこの書は、十七世紀の言説を構造づけている生と死の極端な緊張関係を代弁する。

後の啓蒙主義との比較可言えば、このような慣習は愚にもつかないものである。しかし近世ドイツは、他ならぬこの愚の存在意義をよく知っていた。愚者文学が栄え、「痴愚神札賛」を書いたエラスムスがなお權威であったこの時代、世界は所詮、愚者の巢窟であり、出口のない永遠の愚のなかに存在するものであった。

そして、愚であるからこそ、悲惨な時代を堪えることもできた。これは、啓蒙主義が愚の改善と教育に目標を置くのとは対照的である。また同時代のいわゆるバロック芸術が、知性と美的洗練に基づく貴族的な精華であることも、一見したところ異質である。しかしここで十七世紀が、この世を一つの演劇舞台と考える「世界劇場」の時代であったことを想起するならば、下層の民衆が愚者の役割を受け持ったゆえにこそ、上層階級は洗練された知者の役割を受け取ることができたのである。愚と知とが相補的に一つの舞台を形成することで初めて、社会秩序はかううじて維持されることができた。しかも、神から隔てられ、没落の相の元に置かれたかりそめの演劇舞台、一つの暫定的かつ相対的な場所である演劇舞台を根底において支えたのは、むしろこの、神に与えられた「時」を愚の役割において生きた人々、愚であることを承知しつつその役割を引き受けた人々のほうだったのではないか。代表的な知的バロック芸術さえ、その遊戯的精神の極まるところでは、もはや道化的な愚の戯れと無縁ではなくなってくる。とすれば、いわばこの時代全体が、愚をもって虚無的な世界に対処したということなのか。

実のところ、バロック民衆説教師の出自は、その大半が聴衆と同じ下層階級であった。近世において、彼らは上層文化と下層文化との重要な仲介者である。春の日に、彼らもまた己れの源に帰り、民衆とともに愚者を演じた。道化 (Zart) の一人芝居に耳を傾け、教会のなかで、ともに一群の愚者 (Zem) と化す民衆たちは、己れという存在の限界性、はかなさと愚かしさへの諦念に貫かれている。彼らには、この世が一つの「愚神の戯れ」(エラスムス) にすぎないという宿命を、仕方なく甘受する覚悟があった。

当時十七世紀の世相諷刺的愚者文学に、モシエロシユによる『フイランダー・フォン・ジッテヴァルトの不可思議にして真実なる幻影』というものがあるが、その一葉の表紙絵は示唆的である。そこには、さまざまな悪徳を象徴する仮面を体中にぶら下げた一人の道化が中央に立ち、その右には救済への道が、左には破滅への道が暗示されている。そして道化の上方では、天使もまた仮面をかぶっている。一体どの仮面の裏側に真実の救済が隠されているのか、いっこうに定かならぬ万華鏡的世界のなかで、道化／愚者としての近世的人間はひとり立ち尽くし、世を堪えしのぶ。